

## I 活動報告

### 広島文化学園大学看護総合研究センター・FD委員会講演会報告 —研究茶話会の開催—

看護総合研究センター

土肥敏博 森田克也 加藤重子 田村和恵 今坂鈴江 矢野秀樹

看護学部 FD 委員会

山内京子 加藤重子 石川孝則 前信由美 進藤美樹

金澤 寛 今坂鈴江

岡本陽子

#### 趣旨

看護総合研究センターでは、FD委員会との共同で、「広島文化学園大学看護総合研究センター 規程 第1条 広島文化学園大学学則第66条第2項 第2条 研究センターは、本学部の学術研究活動の奨励・助成・支援を行うとともに、地域社会の学術研究発展に寄与する活動を行うことを目的とする」に則り研究会を開催する。気楽に話し合える会にしたいと思います。

#### 第1回研究茶話会

日時：2019年6月20日（木）、13:20～14:50

場所：第2会議室

対象：看護学部教員 参加者 21名

茶話会：ホットコーヒー・ミルク、リンゴジュース、冷紅茶、冷緑茶、お菓子

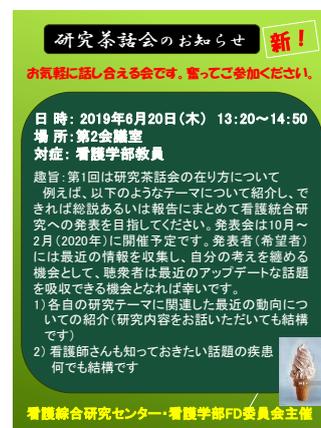
協議事項：研究茶話会の在り方について、以下のことが了承された。

趣旨：「看護師さんもおきたい話題の疾患」あるいは「発表者の研究テーマに関連した話題」、その他発表者の自由選択についての勉強会開催を主とする。主として看護学部教員による発表とし、対象は学部教員および看護研究科大学院生とする。発表者は、できれば総説あるいは報告にまとめて看護統合研究に発表する。発展的に研究テーマとして取り上げる、科学研究費申請の課題とする。発表者には最近の情報を収集し、自分の考えを纏める機会として、聴衆者は最近のアップデートな話題を吸収できる機会となれば幸いです。

講演タイトル 「バージニア大学の想いで～ストックホルムストーリー～」

演者 看護学部教授 土肥敏博

オープニングセレモニーはまずお楽しみいただこうと、筆者が1977年10月から1980年2月まで米国国立バージニア大学医学部内科・臨床薬理 Dr. F. Murad 研究室に留学したときの研究室の様など写真を供覧しながら話をさせていただいた。留学に際し、広島大学歯学部教授辻本 明



**研究茶話会のお知らせ** **新!**  
お気軽に話し合える会です。奮ってご参加ください。

日時：2019年6月20日（木） 13:20～14:50  
場所：第2会議室  
対象：看護学部教員

趣旨：第1回は研究茶話会の在り方について  
例えば、以下のようなテーマについて紹介し、できれば総説あるいは報告にまとめて看護統合研究への発表を目指してください。発表会は10月～2月（2020年）に開催予定です。発表者（希望者）には最近の情報を収集し、自分の考えを纏める機会として、聴衆者は最近のアップデートな話題を吸収できる機会となれば幸いです。

- 1) 各自の研究テーマに関連した最近の動向についての紹介（研究内容をお話いただいても結構です）
- 2) 看護師さんもおきたい話題の疾患何でも結構です

看護総合研究センター・看護学部FD委員会主催

先生、大阪大学高次脳科学研究所教授垣内史郎先生にお世話いただいたことに深謝申し上げる。渡米は、成田からシカゴオヘア空港へ到着し、空港の公衆電話で先に留学滞在中の市原紀久雄さんに電話した。今のように携帯電話のなかった時代で、交換手を呼び出し相手の電話番号を告げ、言われた料金を投入する作業にすっかり緊張してしまい、相手が電話に出たあともしばらく英語で喋っていたようで、市原さんから、「土肥さん 日本語で良いです」と言われてああそうかと苦笑いしたのを覚えている。リッチモンド空港に市原さんが車で迎えにきてくれた。バージニアまでのハイウエーの両側全山の紅葉はとてもスケールの大きな錦絵でまず度肝を抜かれた。途中、昼食にマクドナルドに立ち寄りビッグマックを初めて食べたとき、米国の食べ物はマズイと聞いていたのだが、こんな美味しいものがあるとは思ってもみなかった。Murad 研での研究生活が始まって特に目新しいということはないなアと思いきや、やがてとても違うことに気づかされた。それは、研究にとって最も大切なアイデアがとても斬新で、奇抜で、挑戦的であり、無謀と思えるようなことに果敢に挑戦するということであった。その点、日本は物まね大国と言われていたように、アイデアにもどこか物まね的なところがあることに気づかされた。Murad は本気でノーベル賞を狙っていると教室員がいつも言っており、Murad のストックホルムストーリーとして皆も意識していた。この 20 年後 1998 年に、NO/G-cyclase の研究で実際ノーベル賞を授与された。筆者もその研究室で汗を流すことができたのは幸運であった。詳しい研究内容は紙面の関係で割愛するが、当時バージニア大学薬理学には G 蛋白質の発見でノーベル賞受賞者 Dr. A.G. Gilman らがすでに行っていて、薬理学では月に一度 B&B という勉強会が行われていた。B&B とは Beer & Bull Shit の略で、ブルシットとは Bull (去勢されていない牛) の Shit (糞、俗語くそ) という意味らしい。日本語にすると“うしのくそつたれ”とでもなるのでしょうか、皆は夕刻一旦家に帰り、夕食を済ませてから再び大学のセミナー室に集まり、その日の発表者(研究成果)にたいしてビールを飲みながら全く無礼講の議論をするのである。筆者も一度発表者として指名されたことがあった。ここでもまた突飛な質問、指摘があり、なるほどそのようにも考えられるのかと感心したものだ。

そんなわけで、この研究茶話会は B&B にヒントを得てお茶を飲みながら気楽に語り合いたいという趣旨で発会したのである。



## 第2回 研究茶話会

日時：2019年7月18日（木） 、13：20～14：50

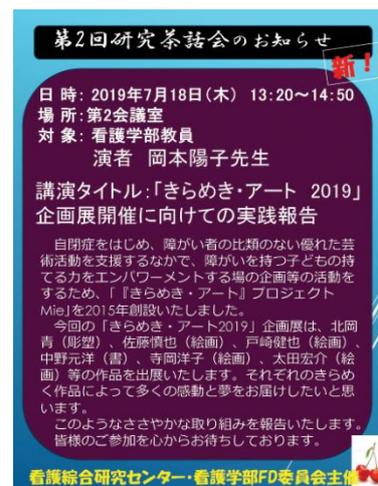
場所：第2会議室

茶話会：ホットコーヒー・ミルク、冷緑茶、お菓子を用意しています。

参加者 14名

講演タイトル 「きらめき・アート 2019」企画展開催に向けて  
実践報告

演者 看護学研究科 岡本陽子先生



広島文化学園大学においては、研究ブランディング事業に取り組んでいる。その趣旨は、「乳幼児から高齢者、障害のあるなしに関わらず、すべての人々が健康に暮らす共生社会の実現と自治体等と共に社会的弱者と呼ばれる人々を対象とした対人援助の研究と実践を推進することである。」としている。

看護学部における8月に開催した第2回FD研究茶話会において、筆者は「きらめき・アートプロジェクト」活動の報告をした。このプロジェクトは、まさに共生社会 WITH LIFE 実現の取り組みである。

自閉症をはじめ、障がい者の比類のない優れた芸術活動を支援するなかで、障がいを持つ子どもの持てる力をエンパワーメントする場の企画活動をするため、ボランティア団体『きらめき・アート』プロジェクトが2015年創設された。

自閉症等障害のある児童生徒対象に行う「特別支援教育」とは、障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、幼児児童生徒一人ひとりの教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うものである。なかでも、自閉症スペクトラム障害（Autistic Spectrum Disorder、略称ASD）は、発達障害のうち、厚生労働省（2020）によると、日本では、約100人に1～2人存在し、男性は女性より数倍多く存在すると報告されている。相互的な対人関係の障害、コミュニケーションの障害、興味や行動の偏り（こだわり）等の特徴が現れる。1歳を過ぎた頃からサインが現れ成長するにつれ症状は変化し、人それぞれに多様化するといわれている。

5年前から、筆者は、この「自閉症スペクトラム障害」と診断されている発達障害の子ども（成人になった人を含む）の絵画・塑像・書の企画展「きらめき・アート」を開催している。中には、自閉症の人に多く見られるサヴァン症候群（savant syndrome）と思われる作品も展示している。その目的は、「企画展を通して自閉症等の子どもたちの芸術性の高い作品の素晴らしさを紹介するとともに、その保護者を支援をする。」としている。

「きらめき・アート」企画展に取り組んだきっかけは、予期もせず、突然の出来事であった。

発達障がいの少年Aがマラソン大会で走っている最中に、突然倒れる。としたアクシデントがあった。そして救助に当たった筆者に、その母親は語った。「少年は高機能自閉症である。」

と。その言葉から「A少年は何ができますか？」問うたところ、退屈な授業中は消しゴムのカスを集めて粘土にして恐竜を創るとのこと。どのようなものか見当がつかなかったので、「よろしければ、一度見せてください」と。後日、母親が持参した作品に驚嘆の声を上げた筆者でした。内気で口数も少ないこの発達障がいの少年の作品なのだ（図1）。

これらの2人の会話から少年Aの人生が大きく変わり、筆者のプロジェクトへの取り組みが始動した。

小・中学校は特別支援教室を経て、当時高等学校は専門系学校在学中であった。これをきっかけに芸術大学に進学、その後研究員として創作活動に励み作家としての歩みを始めた。

少年Aの母親の語りには「息子が4歳の時に、高機能自閉症と診断されてから、子どものゆっくりとしながらも少しずつ成長していく姿に ささやかな幸せを感じつつ、反面 親が子どもに思い描く 夢や希望を持ってはいけないと自分に言い聞かせて来ました。家族で前向きに生きようと懸命に頑張ってきたけれど、いつも頭の片隅には『親亡き後の生活』という先の見えない不安がありました。」と。この言葉にプロジェクトは背中を押されている。

この企画展開催は県内4回県外1回となり、5年を経過したが、1日あたり100人、5日間開催すれば500人とした来場者があり、三重県、三重県社会福祉協議会、三重県教育委員会、さらには、三重県自閉症協会等の後援を得ることができた。まさに、行政から障害者団体等に至るまで地域一体の共生社会実現に向けた取り組みであり、また、弱者と捉えがちな障害者の「強み」を発揮する場の貢献に寄与できると考える。

企画展には、障害者として隠された才能を「見だし、引き伸ばす、さらには発揮する場と捉え、自閉症やダウン症候群等の障がいのある子どもや成人となった数人の作品を展示している

（図2 図3 図4）。ここ広島県においても障害者や団体や県、そして大学からの後援をいただければ開催したいと考える。



図1 少年A



図 2 少年 B



図 3 少年 C

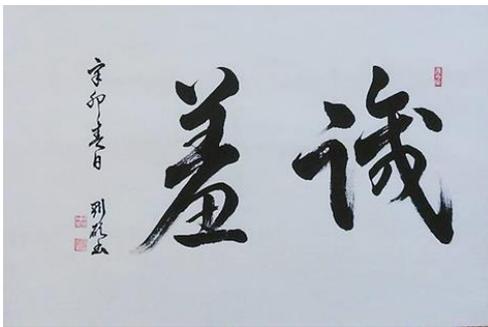


図 4 少年 D



2019 年開催会場—1



2019 年会場—2

### 第3回 研究茶話会

日時：2019年9月19日、13：20～14：50

場所：205教室（今回は場所が変更）

対象：看護学部教員13名、大学院生5名

お茶とお菓子

演者：森田克也先生

講演タイトル：“科研費はこうしたら採択される”

科研費採択実績豊かな森田先生より、申請書の書き方、採択間違いなしのノウハウをご教示いただいた。特に、科学研究費採択率の最近の動向、科研費種目や申請書の最近の変更などについて注意すべき点の紹介があった。

申請書の書き方について、基盤研究について、研究の目的、実験計画の充実を図ること、挑戦的萌芽研究では、研究の斬新製、チャレンジ性や成功した場合の社会的貢献などを詳述することの大切さが話された。

また、審査員はどこを見て評価するかといった審査員から見たポイントなど詳しい解説があった。Rsearchmapへの登録の仕方は後日通知する。

今回は、大学院生にも呼びかけた結果5名に参加があり、熱心にメモをとっていた。今後研究茶話会へは大学院生の積極的参加を呼びかけることとした。

\*次回より参加費100円。大学院生は無料。

第3回研究茶話会のお知らせ

日時：2019年9月19日（木）13：20～14：50  
場所：205教室  
対象：看護学部教員  
演者 森田克也先生

講演タイトル：  
「科研費はこうしたら採択される」

科研費採択実績豊かな森田先生より、申請書の書き方、おまじないの仕方など、採択間違いなしのノウハウをご教示いただきます。

看護総合研究センター・看護学部PI委員会主催

